

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00050

研究課題名(和文) ジャック・デリダにおける宗教哲学の諸問題

研究課題名(英文) Jacques Derrida and the Questions of religious philosophy

研究代表者

守中 高明 (MORINAKA, Takaaki)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：80339655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代フランスの哲学者ジャック・デリダが錬成した宗教的思考をめぐる独自の諸概念を日本の鎌倉仏教の解釈に導入することにより、報告者は法然・親鸞・一遍らの中世浄土教を現代において実効性をもつ思考へと刷新することに成功した。著書『他力の哲学 赦し・ほどこし・往生』(河出書房新社、2019年2月、全249ページ)および『浄土の哲学 念仏・衆生・大慈悲心』(同前、2021年8月、全270ページ)がその成果である。

この2冊の刊行後、複数の仏教学会における講演や発表、仏教系およびキリスト教系の雑誌・新聞における寄稿や著者インタビュー等の依頼があり、それぞれ少なからぬ反響を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、神話的言説として理解されがちな中世浄土教の教義を現代ヨーロッパ哲学に接続することで、その解釈史に根本的変更をもたらした。たとえば法然の説く「往生」が想像上の物語ではなくデリダ的「差延」と一致するリアルな時間の経験であること、「阿弥陀仏」が超越的「一者」ではなくスピノザ的「自然」の力能であり「信」とはその生成の必然を生きることに存すること、一遍における「踊り念仏」が独自の心身並行論により被差別の民を抑圧的道德観念から解放するデュルーズ&ガタリ的な集団的アレンジメントの実践であること。これら諸点を異論の余地なく論証・解明した本研究は、宗教哲学に真の革新的視座を打ち立てたと言える。

研究成果の概要(英文)：By introducing into the interpretation of Japanese Kamakura Buddhism the original concepts of religious thought elaborated by the contemporary French philosopher Jacques Derrida, I have succeeded in renewing the medieval Pure Land Buddhism of Honen, Shinran, and Ippen into effective thought for the modern age. My books "The Philosophy of the Power of Otherness: Forgiveness, Gift, and Rebirth into the Pure Land" (Kawade Shobo Shinsha, February 2019, 249 pages) and "The Philosophy of the Pure Land: Nembutsu, All Sentient Beings, and the Great Compassion" (Kawade Shobo Shinsha, August 2021, 270 pages) are the results of this work.

After the publication of these two books, I have been asked to give lectures and presentations at several Buddhist conferences, and to contribute articles and author interviews to Buddhist and Christian journals and newspapers, each of which has received a considerable response.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：脱構築 赦し 贈与(ほどこし) 生成変化 内在/超越 自然 反-差別 共同体

1. 研究開始当初の背景

日本におけるジャック・デリダ研究は、過去 15 年ほどのあいだに大きな深まりを見せた。『哲学の余白』(1972 年:邦訳 2007 年〔上巻〕・2008 年〔下巻〕)、『散種』(1972 年:邦訳 2013 年)などの初期の重要著作、ならびに『マルクスの亡霊たち』(1993 年:邦訳 2007 年)、『友愛のポリテックス』(1994 年:邦訳 2003 年)、『ならず者たち』(2003 年:邦訳 2009 年)、『動物を追う、ゆえに私は(動物)である』(2006 年・死後出版:邦訳 2014 年)などのいわゆる「倫理的 政治学的転回」以後の著作群が翻訳されることで、デリダの哲学の軌跡はほぼ完全に通時的にたどれるようになった。また、全 43 巻が予告されている未刊行講義録のうち『獣と主権者 []』(2008 年:邦訳 2014 年)、『同 []』(2010 年:邦訳 2016 年)、『死刑 []』(2012 年:邦訳 2017 年)などが翻訳されることにより、主要著作からだけでは見えないデリダの思考の生成も分析・検討し得るようになった。

これらの受容のうに日本においてもデリダについての学術研究論文が増え始め、研究書もモノグラフィが累計 10 冊を数えるにいたった(報告者の科研費採択課題の成果『ジャック・デリダと精神分析 耳・秘密・灰そして主権』(岩波書店、2016 年)もそのうちの 1 つである)。しかしながら、新たな段階に入ったデリダ研究において、なお大きな欠落をなすのが「デリダにおける宗教哲学の問い」であった。この問題系はデリダの思考の軌跡の中でつねに伏在しつつも 1990 年代からようやく明示的に論じられるようになった問題系であり、具体的な展開としては『名を救う』(1993 年:邦訳 2005 年)、『信と知 たんなる理性の限界における「宗教」の二源泉』(1996 年:邦訳 2016 年)、『死を与える』(1999 年:邦訳 2004 年)の 3 冊が刊行されているのみであり、したがってこの問いを主題的に論ずる研究書は世界的にもごくわずかであり、日本においては皆無であった。

報告者は、こうした状況をふまえ、この問題系への最初のとまった貢献をすべく本研究を計画し、作業に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、二重の目的を有する。一方の目的は、後期デリダの「宗教哲学」に明示的に関わる著作を読み解くと同時に初期の著作群において遂行された存在論の脱構築を再読することによって、その思考のうちにある「宗教的なもの」を組み替える諸概念を抽出すること、他方の目的は、デリダのそれら諸概念を日本の鎌倉仏教に接続し、相互に触発させることによって、たんなる神話的言説と見なされがちな法然・親鸞・一遍らの中世浄土教を厳密に哲学的に分析することである。この二重の作業をとおして、現代においてこそ実効性をもつ新たな宗教学的 倫理学的実践哲学を創出することを報告者は目指した。

3. 研究の方法

(1)「差延」ないし「間隔化」と呼ばれる非 現前的な時間性(2)与える者にも受け取る者にもそれとして現前することのない純粋な出来事としての「贈与」(3)罪の告白も改悛も償いも前提としない無条件の「赦し」(4)自己の意志や権能には還元不可能な絶対的他性としての「他者」 デリダによって錬成されたこれらの限界的概念を、(1)法然による「称名念仏」の特異な時間性とその反復構造(2)一遍における「賦算」と呼ばれる念仏札の無限のほどこし(3)法然・親鸞における称名念仏による「滅罪」(4)法然・親鸞・一遍それぞれにおける無限者たる阿弥陀仏の「他力」のもとへの自己放擲 といった中世浄土教における根本諸概念と比較対照することによって、報告者は現代ヨーロッパと中世日本とをつらぬく普遍的な救済の地平を探った。

4. 研究成果

2018 年度から 2021 年度の 4 年間に、報告者はつぎの 2 冊の書下ろし単行本を出版することができた: 1.『他力の哲学 赦し・ほどこし・往生』(河出書房新社、2019 年 2 月、全 249 ページ) 2.『浄土の哲学 念仏・衆生・大慈悲心』(河出書房新社、2021 年 8 月、全 270 ページ) それぞれの著書において、報告者は以下の問題系を分析し解明した。

1. 『他力の哲学』

(1)法然における救いの無条件化と仏教的共和主義:浄土教の平安的パラダイムにおいて宗教的救済は厳しい戒を守り激しい行を修すことのできる少数者および寺院に寄進できる貴族階級のみにより約束されていた。法然は、同時代に生きるすべての人間を「凡夫」と規定し、究極の易行たる称名念仏に教えを純化することで救済を完全に無条件化した。その万人平等の教えは当時の常識であった「王法」=天皇の権力への「仏法」の従属をも峻拒する共和主義へと先鋭化した。

(2)親鸞における称名念仏をとおしたマイノリティとの連帯:南無阿弥陀仏=「帰依 無限者に」という遂行的発話をとおしてそのつど新たな この私 の誕生を反復する称名念仏は、その諸主体の属性を一切問わず、終わりなく開かれた社会的紐帯を創り出す。「僧」と「俗」とが

相互に中間地帯へと脱領土化するその生成変化の運動は、とりわけ被差別民と親鸞による共同体形成を可能にした。

(3) 法然・親鸞における「滅罪」の倫理学：人間存在の善悪が「業縁」= 社会関係の中で生ずる不可避の帰結であることを知る両者は、善悪という道徳的価値の二項性そのものの彼方で衆生を迎え入れる力こそが阿弥陀仏の「大慈悲」であると説く。それは、キリスト教的「原罪」思想にも、存在の有責性を前提とし「良心」の「呼び声」に聴き従うときにのみ「現存在」が「責任あるものとして存在」し得ると言うハイデガーの「存在論的原罪」主義にも、等しく抗する「原赦し」主義の教えである。

(4) 死刑廃止論の現在：かの永山則夫裁判の控訴審における「船田判決」は、罪を発生させた社会の構造的力学への分析にその根拠を置き、殺人者を生んだ「劣悪な環境」に対し「早い機会に救助の手を差し伸べる」という「義務」怠った「国家社会」、その「福祉政策の貧困」もまた「被告人とともにその責任」を負わねばならないと断じた。それは政治に汚染された司法を超える高度に社会倫理的な判決であり、今日こそ参照されるべき法然・親鸞的「赦し」の思考がそこにある。

(5) 一遍における「ほどこし」の社会学：35歳で出立し50歳で没するまで続けた諸国を遍歴する布教の旅において一遍は「賦算」と呼ばれる念仏札のほどこしをその活動の主軸とした。「信・不信をえらばず、浄・不浄をきはらず」を原理とするその活動は、無条件かつ無際限な贈与であり、かつ、いかなる見返りをも求めない純粋贈与であった。交換の回路に回収されぬその贈与の力は新たな社会的ネットワークの形成へと帰結した。

(6) 「踊り念仏」による集団編成：諸国遍歴の布教の旅 = 「遊行〔ゆぎょう〕」の随所で一遍は「踊り念仏」の場を作り出した。絶対の非 所有と一切の経済活動からの脱却への意志を宣言しかつ実行した「捨て聖」たる一遍は、「踊り念仏」を組織する際にも参加者たちをその社会的属性と経済的地位から解き放ち、念仏によって「触発しかつ触発される能力」のみに還元 = 縮減した。主体から「此性」(ドゥンス・スコトゥス)へ生成変化する多数多様体からなる集団それは衆生の「生」をあらゆる道徳的規範の外で絶対的に肯定する実践であった。

(7) 法然による死のオブセッションからの解放：浄土教の平安的パラダイムにおいては、源信の『往生要集』中の一文「臨終の一念は百年の業に勝る」が象徴的に語るように、みずからの有限性の意識をつねに研ぎ澄ませ、生の価値を予見された死の瞬間から遡及的に問うべきことが広く説かれていた。貴族階級における「臨終行儀」の普及・隆盛がその証左である。この認識は、「死を真とみなして保持」しその「際立った切迫」に身を晒しつつそれを先駆的に覚悟することによってはじめて現存在は本来の時間を生き得るとするハイデガーの実存論的分析論と相通的なものである。ところが、庶民たちはみずからの有限性を知ってはいてもその時間を「死の可能性への先駆」によって「本来的」なものたらしめることができない。法然は、源信 = ハイデガー的な英雄的決断主義をとることがおよそ不可能であり日々の暮らしの中に「頹落」してあるほかない庶民たちにむけて「臨終ノ平生」の区別は往生にとってなんら関与的でなく、称名念仏による往生は万人に開かれていると説き、庶民たちを「死 = 墮地獄」のオブセッションから解放することに成功した。

(8) 法然・親鸞・一遍による現実の経験としての「往生」：法然が確立した称名念仏は、それを実践する衆生をある特有の時間錯誤に導き入れる。称名念仏による往生は、その端緒においては法蔵菩薩の成仏の条件であり、帰結において法蔵菩薩の阿弥陀仏への成仏を可能にしたと説かれるが、往生という出来事それ自体は眼前で起きた事柄や生きられた経験として經典の説話の内部ですら語られてはいない。それは一方において、すでに成仏した法蔵菩薩の側から事後的に確認されているだけであり、他方において、成仏以前の法蔵菩薩の誓願の中でそれが起きるであろうことが約束されているだけである。すなわち、衆生の往生は「すでに」といまだのあいだにあって、ただ事後性の未来完了という時間性のみが指し示す出来事であり、したがって、過去 現在 未来という継起的時間性の内部にその「外」を開く非 現時的なる純粋な出来事なのである。この論理は、親鸞における往生を「信」の獲得と同時に起きる出来事とみなす「現生正定聚」という思考、そして一遍における「三世裁断の名号」= 過去・現在・未来という制度化された時間構造を断ち切る称名念仏、そこからの脱却としての「無始無終の往生」という思考へと展開されていく。「生ける現在」(フッサール)の継起的連鎖という幻想から主体を解き放ち、時間の継起的秩序の内部に開かれた空隙の中でみずからの生を始まりも終わりもない「現在なき反復」にゆだねること この点において称名念仏はデリダ的「差延」の経験にほかならず、したがって現代を生きる私たちにおいてこそ意義をもつ教えである。

2. 『浄土の哲学』

(1) 内在性の領野としての浄土、有限性を消去する往生：浄土教の平安的パラダイムは、死へと求心化された時代精神とともに構築された宗教的 文化的 美学的パラダイムであり、歴然たる階級意識の産物であるそれは、庶民を排除するものであった。法然は、戒を守れぬがゆえに「罪」の意識に苛まれ往生への道を閉ざされていると感じていた庶民たちをその道徳的抑圧から解放し、「臨終行儀」よりも「平生の時」の念仏こそが人を救うと説いた。その態度は、人間存在に「罪」と「負い目」の否定的自己意識を植えつけるキリスト教を根本的に批判したニーチェのそれに近い。法然にとって、浄土ははるか彼岸の超越的な場ではなく、衆生の生を今 ここで留保なく肯定する力能としての称名念仏がその声によってそのつど生成させる内在性の場であった。法然の直弟子たる親鸞においてこの方向性はさらに徹底化される。「信」も「行」も衆

生が自力で獲得し実践するのではなく、阿弥陀仏が「廻施」するものであり衆生にできるのはただその贈与を受け取ることだけであり、かつ、その贈与を受け取った瞬間に往生は定まると説く親鸞にとって往生は死後に仮定される想像上の出来事ではない。阿弥陀仏の無限の包摂と迎え入れの力によって人間存在の有限性が問いとして消去されることそれが親鸞にとっての往生であった。

(2) 平等概念を問い直す衆生：親鸞は被差別の民と積極的に関わり共同体的な営みを実践したが、その実践を支えていたのは新たな平等概念であった。常識的思考が平等を語るとき、そこには人間存在の類同性が前提とされており、個々人は同じ類に包摂される特殊性であるがゆえにたがいに異なりつつも平等であると言われる。しかし、親鸞が「さまざまなものはみな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり」と言うとき、そこではたがいを共約する類同性は前提されていない。むしろ親鸞はさまざまな差異をそれ自体として肯定し、たがいが絶対的に異なるがゆえに絶対的に平等であるという存在論的平等の思考を創出している。同じく被差別の民と「踊り念仏」の集団的实践を組織した一遍において、この差異の思考は先鋭化する。「他力の行」とは「田夫野人・尼入道・愚痴・無智までも平等に往生する法」だと言うとき一遍は、みずからの根拠にただ称名念仏だけを置き一切の他律的原理に媒介されない存在たちこそを衆生と呼んでいる。そこには安易なヒューマニズムとは一線を画す別種の平等原理がある。

(3) 「自然法爾〔じねんほうに〕」の倫理学：「如来のひかり」のはたらきを「自然〔じねん〕」の名で呼ぶとき親鸞が告げているのは、包摂や救済という概念の想定させがちな超越的 一者の力ではない。そうではなく、「阿弥陀如来」とは「自然」という「おのずから」「しからしむ」生成そのものであり、いかなる擬人化される存在にも帰属しない「自然」たる「阿弥陀仏」とは、衆生がただそれに内在することができるだけであるような生成する力の名なのである。それはスピノザが「あらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」とした「神あるいは自然」に等しい。「能産的自然」とも呼ばれるその形相なき力能に内在し、超越への欲望と自由意志の幻想を滅却してその必然を生きることそこには現代においてこそ意味をもつ「自然」の倫理学がある。

(4) 無媒介の力としての「他力」：一遍において「自然」の必然を生きる態度は、阿弥陀仏と衆生の関係の組み替えに帰結する。なにものをも起源や第一原因とせず、すべてを生成変化において認識する一遍は、一般に信憑される 帰依する衆生 帰依される阿弥陀仏 という図式を解体し、衆生と阿弥陀仏の双方を名号という言葉の効果、名号という言葉から発生してくるなにかと見なす。つまり、称名念仏を衆生と阿弥陀仏、行為の主体 / 行為の客体という二者の概念的対立が止揚される契機と見なすのではなく、「自然〔じねん〕」である阿弥陀仏へ内在する衆生がそれ自身も「自然」として生成を遂げ「自然」の累乗〔puissance〕としての純粋なる力能〔puissance〕の意志と化すこと。それが一遍における「他力」往生である。

(5) 念仏とマイノリティ：親鸞の思考においていわゆる「悪人正機」説ほど人口に膾炙したものはないだろう。だが、「悪人」とは親鸞の同時代においては、法的概念でも道徳的概念でもなかった。それは漁師・獵師（さらに耕作中に虫類を殺す農民、人を殺める武士）など生き物を屠る職能者たちを明確に指しており、彼らは「殺生禁断戒」に背くがゆえに穢れていると見なされ、それゆえに強い差別の対象となったのであった。その被差別者こそが往生の「正因」だと親鸞は説いたわけだが、親鸞の实践の最大の特徴は、存在に否定性の刻印を押されて排除された被差別の民を救済するためにヘーゲル的概念操作を用いなかった点にある。否定された存在を、その存在の否定性を否定することで肯定し直し、承認しつつ社会へ包摂するという思考は問題の真の解決にはならない。なぜなら、そのような方法論によるかぎり、被差別の民が身に帯びている否定性を消し去ることはできず、その否定性を保持したままで高次の（たとえばヒューマニティという）同一性のもとに位置づけることしかできないから、すなわち、なんらかの超越的審級のうちにその存在を包摂し同化することしかできないからである。それは結局のところ、市民的道徳に帰着するほかない。親鸞はその代わりになにをしたか。「自然」そのものである阿弥陀仏は、充溢した力能でありそのはたらきは否定を知らない。称名念仏するとき、衆生は「自然」という力能の場に内在するのであり、その必然を生きるとき、衆生はみずからもまた否定なき生の充溢を取り戻す。それこそが被差別の民とともにある親鸞による解放の思考であった。

(6) 念仏と結び合い：一遍の衆生済度の活動もまた「悪人」に照準を合わせたものであった。その「踊り念仏」に集ったのは「畝獵漁捕を事とし、為利殺害を業とせるともがら」、すなわち「悪人」たちであり、また他方「非人」と呼ばれた乞食、犬神人、遊女、ハンセン病者、身体障害者などの被差別民たちであった。その集団はなにによって形成され駆動されていたか。それは、デカルトの心身二元論を打破して精神による身体の中核的統御から身体を解放し、独自の心身並行論をとおして被差別の民の実存を抑圧的道徳観念の外で肯定する、そんな反 差別の实践であった。

(7) 主権権力に抗する称名念仏：法然の専修念仏の教えは、同時代の庶民階級に広く受け入れられる一方、朝廷・政権からの弾圧を繰り返し被ったほか、没後もさまざまな批判に晒された。『立正安国論』の日蓮がその最大の論難者である。争点は「王方」= 天皇の権力と「仏法」の関係である。「王方」と「仏法」の弁証法的はたらきによる超越的主権権力の確立を希求する日蓮に対し、法然・親鸞・一遍へと深化していく念仏の教えが求めるのは「自然〔じねん〕」の必然に内在することであり、衆生がそのうちなる超越への欲望の一切を捨てることである。阿弥陀仏という形相なき力能につらぬかれた領野は、日蓮的な主権権力の存立をあらかじめ挫折させ不

可能にする。専修念仏が歴史的に繰り返し排撃されてきたのは、称名念仏のこの反 主権的な力能のゆえである。

(8)浄土コミュニンの問い：近代国民国家が、超越的主権権力によって統治し、人民を「国民」化しつつ捕捉し、「人口」として統計的計量化の対象とし、その「安全」を保障しつつ「領土」内に管理するという装置であり、それは今日誰もがそれを受け容れるべく強いられている普遍的なステータスをそなえている。だが、現代世界に別の原理に準拠する別の場はあり得ないか。称名念仏は、「自然」という無限の形相なき力能へ内在しその生成の必然を生きる実践であり、その点においてルクレティウスからミシェル・セールにいたる自然学的倫理学に深く親和的である。称名念仏者は、その念仏の声＝氣息の力によって大地から離脱し、大気の中へ、すなわちけっして一つの全体へは還元されず、一なるものを構成することのない開かれた非 可算的な微粒子の群れへと生成変化を遂げる。そのとき人は、その非 連続的な出来事とおしてこの閉塞した世界の内部に 外 を穿ち、ある新しい共同性の領野を生き始めることができるだろう。それはまさしく「浄土コミュニン」と呼ばれるべき営みである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 守中高明	4. 巻 12
2. 論文標題 アナーキー原理としての「他力」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『HAPAX 12』	6. 最初と最後の頁 194-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 72
2. 論文標題 現代の思想として親鸞を読み解く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『同朋』2020年6月号	6. 最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 71
2. 論文標題 他力という力、大慈悲の地平 現代思想としての親鸞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『同朋』2019年7月号	6. 最初と最後の頁 17-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 28507号
2. 論文標題 新・往生論 日本浄土教の脱 - 神話化のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中外日報』2019年8月21日号	6. 最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 74
2. 論文標題 「象徴」の政治、外への祈り 天皇制から離脱するために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『福音と世界』2019年11月号	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 28738号
2. 論文標題 阿弥陀仏、あるいは超越なき生成の力 来たるべき仏国土のために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『中外日報』2022年1月3日号	6. 最初と最後の頁 12 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 77
2. 論文標題 差異の絶対性、生成する力 反 差別のための作動配列	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『福音と世界』2022年3月号	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守中高明	4. 巻 76
2. 論文標題 主権権力から別の赦しへ 死刑廃絶のために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『福音と世界』2021年3月号	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 守中高明
2. 発表標題 神あるいは自然 スピノザと親鸞における内在の哲学
3. 学会等名 日本印度学仏教学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守中高明
2. 発表標題 他力・離脱・信 親鸞とエックハルトのあいだ
3. 学会等名 真宗学会大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守中高明
2. 発表標題 「本願」の構造と力 称名念仏・時間錯誤・パフォーマンス
3. 学会等名 東京大学East Asian Academyシンポジウム「仏教と哲学の対話」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 守中高明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430/174-181
3. 書名 アーレント読本：第 部 2「約束と赦し アウシュヴィッツ以後の時代における政治倫理学」を寄稿	

1. 著者名 守中高明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 336/251-269
3. 書名 持続可能な世界への法：第10章「ケアの存在倫理学 可傷性・責任・ホスピタリティ」を寄稿	

1. 著者名 守中 高明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 249
3. 書名 他力の哲学 赦し・ほどこし・往生	

1. 著者名 守中高明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 270
3. 書名 浄土の哲学 念仏・衆生・大慈悲心	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「雑誌論文」「学会発表」「図書」に分類されないものとして：守中高明ロングインタビュー「念仏とは 風 になること である なぜ、他力の哲学=浄土の哲学なのか」、『HAPAX 14』夜光社、2021年11月、pp.6-28。</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------